

# 『十三世紀フランス語聖書』 (*Bible française du XIII<sup>e</sup> siècle*) 彩飾写本研究：オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》について

駒 田 亜紀子

はじめに<sup>1</sup>

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIII<sup>e</sup> siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である<sup>2</sup>。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である<sup>3</sup>。本稿では、『十三世紀フランス語聖書』写本伝承系統 (*stemma*) 上失われたオリジナルに最も近いとされる写本の一つ、オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 (Oxford, Christ Church, ms. 178; 以下、ChC 178と略す) を取り上げ、その美術史的位置づけを検証し、散文体フランス語訳聖書における極めて特異な挿絵サイクルの形成過程の一端を明らかにしたい。

## 1. 『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承と ChC 178の位置付け

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIII<sup>e</sup> siècle*』は、サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した中世フランス語聖書研究の第3部において、13世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テキストを指して命名した、写本テキストである<sup>4</sup>。1884年当時、このテキストを完本の状態で収録した写本の存在は知られていなかったが、ベルジェは、聖書前半部については現存最初期の作例の一つ Fr. 899 (パリ、1270-75年頃) を筆頭に5点の写本 (Fr. 6-7; Arsenal 5056; Harley 616; Cambridge E.e.3.52; Strasbourg C iv 10) を、聖書後半部については同じく Fr. 899に加え7点の写本 (Mazarine 35; Fr. 398; Reg.lat.26; Fr. 6258; Rouen 185; KBR 10516; Fr. 12581) を、『十三世紀フランス語聖書』の失われたオリジナルに近い作例として挙げている<sup>5</sup>。

本稿の対象となる ChC 178は、新約聖書のみを単体で収録 (後述) する写本である。旧約・新約聖書全編を収録する完本の場合には詩編を境に前後2巻に分割されることの多いフランス語聖書としては、やや変則的な構成の作例である。ベルジェの1884年の著作では、ChC 178の扱いはカタログ記述における簡単な言及にとどまるものの<sup>6</sup>、巻末の補遺 (p. 448) において<sup>7</sup>、『十三世紀フランス語聖書』後半部の「初期」(オリジナルに近い本

文を伝える) 写本群(上述)に加えるべきことを指摘している<sup>8</sup>。

一方、ベルジェの研究では検討対象とされなかった写本や1884年当時は存在が知られていなかった写本を加え、新約聖書諸書の校訂版編纂に向けて詳細な分析・考察を行っているのが、1960年代以降に発表されたデ・ポールク、デコー、スネッドンらによる研究である<sup>9</sup>。中でも、クライヴ・スネッドンは、1978年オクスフォード大学に提出した博士論文とその後に表示した雑誌論文において、『十三世紀フランス語聖書』福音書の伝承初期段階のテキストを伝える写本として、ChC 178を含むベルジェの初期写本リストに6点の作例(Bern 28; St-Omer 68; M.494; Y. Thompson 9; Thott 7°2; Chantilly 5)<sup>10</sup>を検討対象として追加し、初期写本伝承系統図(*stemma*)を作成した<sup>11</sup>。それによれば、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの初期伝承には4つの段階(*states*)、すなわち初期段階 $x$ 、これより派生した二つの相互に独立した改訂版(*revision*)  $a$  および  $b$ 、そして改訂版  $b$  よりさらに派生した  $b6$  を識別することができる<sup>12</sup>。我々の写本 ChC 178は、スネッドンによる初期写本伝承系統図では、ベルジェのリストに含まれていた Rouen 185 および Fr. 12581 とスネッドンが追加した Bern 28 とともに、失われたオリジナルに最も近い初期段階  $x$  に位置づけられており、Rouen 185 を底本とする校定版編集においても参照されている。

## 2. オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館、178番写本 (Oxford, Christ Church Library, ms. 178)<sup>13</sup> (図1-8)

133フォリオ、350 x 270mm

収録テキスト：新約聖書(福音書-黙示録)

制作地：フランス北部

制作年代：1270年代前半?

### (1) 写本の概要

ChC 178は、『十三世紀フランス語聖書』版新約聖書全編(福音書-黙示録)を収録する写本である。巻頭(fol. 1-6v)には、聖書本文(fol. 7-133v)と同時期に(聖書本文の写字生とは異なる手によってではあるが)作成されたと思われる<sup>14</sup>、本書収録の新約聖書各書各章の冒頭句一覧(目次)が置かれていることから、ChC 178は当初より新約聖書単体の写本として制作されたと考えられる。ユダ書(fol. 126v)と黙示録(fol. 127-)の間に1葉の欠落(それに伴い、ユダ書末尾と黙示録冒頭が逸失)が確認されるが、これ以外には聖書本体に欠損フォリオは認められない。

ChC 178の来歴は、現在の装丁が施された際(17世紀)に巻頭・巻末の見返紙(表・裏表紙の内側に貼付されたビフォリウム状の効き紙・遊び紙)として再利用された<sup>15</sup>パランプセスト(故紙)に残るラテン語文書やフランス語による蔵書銘等を手がかりに、ある程度まで推測する事が可能である<sup>16</sup>。これらの故紙には15世紀中葉および1554年の年記を持

つフランス東部マコン司法管区の裁判記録類が含まれており、ChC 178は17世紀の装丁が施された時点でマコン近辺に在った可能性が高い。その後、ChC 178は、1692年にクライスト・チャーチの図書館に寄贈され、今日に至る<sup>17</sup>。

## (2) 彩飾の様式

ChC 178の挿絵彩飾は、テキスト欄<sup>18</sup> 1 コラム分の幅（約85ミリ）の長方形パネル状ミニアテュール、形状により 1 コラムの1/3～3/4分程度の幅を占める物語イニシアル、ミニアテュールや物語イニシアルを伴わないテキスト下位分節の冒頭を記す本文 2 行分の高さの朱・青インクによるフィリグラ（線條装飾）イニシアル、ページ上端余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトルより構成される。パネル状ミニアテュールは使徒言行録冒頭（fol. 102v）の 1 点のみであるが、サイズ・形状とも変化に富む物語イニシアルは、ユダ書と冒頭部を欠く黙示録以外の新約聖書各書（使徒言行録も含む）、ヨハネ伝全22章、ロマ書、コリント 1・2 書およびガラテア書の各序文（fol. 66v, 73, 79, 83v, 85v）、パウロ書簡のうちロマ書、コリント 1・2 書、ガラテア書およびエペソ書 4 章までの全章の冒頭（fol. 67-86v）に、それぞれ配置されている。筆者の知る限り、旧約・新約聖書全編を通じ聖書各書の冒頭と詩編の 8 分節冒頭（1・26・38・52・68・80・97・109編）以外の本文分節にミニアテュールや物語イニシアルを配置する習慣の無い『十三世紀フランス語聖書』写本彩飾において、ChC 178の過剰とも言える物語イニシアル配置は極めて異例である。しかも、史伝的な場面表現の典拠となる題材に乏しいパウロ書簡諸書の下位分節の物語イニシアルは、多くの場合 3 ないし 4 個のメダイオンを縦に連ねた構成をとっており、画家は与えられたスペースを埋めるためか、アトリビュートの剣を手にしたパウロが各地の信徒に語りかける姿を、多少の変化を加えつつ、ひたすら反復している（図 4-8）。

ChC 178の挿絵彩飾は、その様式的特徴から、少なくとも二人の彩飾画家の手になると考えられる<sup>19</sup>。二人の画家の作風は、人物の相貌・頭髪あるいは姿態や衣装表現、さらには画面枠を兼ねる建築モチーフやイニシアル先端部に戯れるグロテスクあるいはドロルリー・モチーフのレパートリーに至るまで、様式的に非常に近似しており、彼らが活動の場所・時期を同じくすることに疑いの余地はない。

第 1 の画家は、マタイ、マルコ、ルカ伝冒頭およびヨハネ伝全章、ロマ書序文からコリント 1 書15章までの全物語イニシアル（fol. 7-78；折丁2-10）、第 2 の画家はコリント 1 書16章からヨハネ 3 書までの全物語イニシアルおよび使徒言行録冒頭のパネル・ミニアテュール（fol. 79-126v；折丁11-16）を担当する。二人の担当範囲がコリント 1 書の途中で交替しているのは、作業を折丁単位で分担したためと思われる。

ChC 178の第 1 の画家（図 1-3）の様式的特徴は、彼の描く壮年男性の頭部に最も良く看取される。マタイ伝冒頭の＜エッサイの樹＞（図 1）の底辺に横たわるエッサイや、ルカ伝冒頭の＜ザカリアへの告知＞（図 2）の香炉を振るザカリア、あるいはロマ書冒頭

イニシアル内の執筆中の聖パウロなどに見られる、体軀に比してやや大きく額の秀でた逆三角形の頭部や、額中央の生え際で1～2個の小さな渦巻き状に強くカールする前髪、生え際から顔の輪郭沿いに側頭部へ向かって強いウェーブを幾重にも描く豊かな頭髮などが、特徴的な細部である。見開いた上目遣いの逆三角形の眼や、眉間から真直ぐに伸びる尖った小さな鼻は、人物に厳しい表情を与える。壮年男性に比して、女性や若者は、＜ザカリアへの告知＞の天使や＜エッサイの樹＞の幹の中央に座す正面観の聖母マリアの頭部に見られるように、卵形の頭部に丸みを帯びたあごを持つ。ドラプリは、横たわるエッサイの下半身を覆う掛布では折り重ねられた細い襷が折れ曲がる大きなパターンをなし、座像の場合には肩から腕へと大振りな三角形のドレープを落としながら両膝の間に深いV字状のくぼみを作り、玉座の一部にも掛かるたっぷりした三角形のシルエットを描く。立像の場合、人物たちは、腰を片側に突き出すように上半身を湾曲させ、ヴォリュームのあるマントを背中から腰にかけて襷を畳みつつたわませ、束ねた端を腹前で前腕部と胴体との間に挟み込んだり、片手を覆うようにして保持したりする（図2、3）。比較的小さな画面の中でも、人物たちの動作、とくに話す仕草を示す両手は指先に至るまで表情豊かである。衣襷は黒の細い描き起こし線により表現され、黒の輪郭線と衣の縁をめぐる白の縁取り線により輪郭が強調された平面的な賦彩を特徴とする。彩色には濃淡2種類のブルー、くすんだローズ、朱色、人物の肌等に用いられる白色を主体とするパレットに時折エメラルド・グリーンが加わり、背地には研磨された金地ないしは小さな白やブルーのドットを散らしたブルーあるいはサーモンピンク地が置かれる。同様のブルーおよびローズは、イニシアルの文字本体とその外側を囲む枠との間のスペースでは、3個組の小さな白点や白線による繊細な蔓草文様を描き込んだ背地に用いられている。

ChC 178の第2の画家の描く人物（図4-8）は、第1の画家のそれに非常に似ているが、第1の画家に比して小さく細長い頭部と、瞳が鼻梁側に寄った相貌により、識別される。ドラプリのヴォリュームは第1の画家のそれに比べ抑制され、マントを羽織った座像のシルエットも筒状に近い（図5、6、8）。立像の纏うマントのドラプリも、V字形の袋状にたわむ内側の襷は第1の画家のそれに非常に近いが、全身のシルエットの起伏はより単調である。第1の画家が濃淡2種類を使い分けたブルーは第2の画家のパレットでは明確な区別はなされないが、朱色、白色、エメラルド・グリーンは第1の画家と同様である。第1の画家と同じくすんだローズは11折丁（fol. 86v）まで用いられるが、12折丁以降はより鮮やかで明るい色調のローズに置き換えられている。挿絵内部の背地およびイニシアルの文字本体とその外側を囲む枠との間のスペースの扱いは第1の画家と同様である。また、使徒言行録冒頭のパネル状ミニアテュールでは、矩形パネル内部を田の字状に分割する金色の細枠と、これに内接する朱色の細帯で囲まれた4個のメダイヨンとの間のスペースも、同様の扱いを受けている。

ChC 178の挿絵彩飾について美術史研究の分野から初めて本格的な考察を加えたのは、



ロバート・ブランナーの1971年の小論である<sup>20</sup>。ブランナーは、天文学・幾何学的図形を伴うパランプセストに描かれたペン素描による人物像の様式分析を主眼とするこの論考において、問題の人物素描<sup>21</sup>を13世紀中葉～1260年代北フランスに由来する何点かの彩飾写本の作例と関連付けた。人物の姿態および衣襷表現については、ハーグの王立図書館所蔵『古代史 *Histoire ancienne jusqu'à César* (世界年代記／ロジェの物語)』(Den Haag, Koninklijkebibliotheek, ms. 78 D 47)<sup>22</sup> (図9) およびパリのフランス国立図書館所蔵の仏語版『聖人伝』(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. nouv. acq. fr. 23686)<sup>23</sup>を、人物の相貌や髪型など頭部の表現については、ChC 178<sup>24</sup>および仏語訳『教会法令集』<sup>25</sup>を、それぞれ様式的に関連が深い作例として指摘する。さらに、これら4点の仏語写本の挿絵彩飾を同一工房の作とした上で13世紀中葉サン・トメールに由来する2点のラテン語写本<sup>26</sup>をこれに加え、以上の6写本を1250年前後から1260年代のサン・トメールの制作とした。また、ChC 178については、さらに比較例としてアラス近郊のモン・サン・テロワ修道院由来の『ラテン語聖書』(Arras, Bibliothèque municipale, ms. 561 & Boulogne-sur-mer, Bibliothèque municipale, ms. 4)を挙げ、両写本の人物頭部の表現に強い類似性が看取されると述べる<sup>27</sup>。

ブランナーが1971年の論考において提案した様式帰属を、13世紀第3四半期のフランス北部に由来する一連の『古代史』写本の挿絵彩飾の分析を通じ改めて検証したのが、『古代史』写本の挿絵サイクルを論じたドリス・オルトロへの博士論文(1989年)である<sup>28</sup>。オルトロへは、ブランナーにより同一工房に帰されたChC 178を含む4点の仏語写本および2点のラテン語写本のうち、ChC 178、仏語版『聖人伝』、ハーグ所蔵『古代史』(図9)のみを同一工房の作とし、これに2点の『古代史』写本を加えた(後述)<sup>29</sup>。さらに、E. ベーア、W. クラーク、A. ストーンズらの研究によりフランス北部のリール、アラスないしはカンブレに帰された13世紀第3四半期の大型ラテン語聖書や交唱聖歌集<sup>30</sup>を様式分析の比較参照項として取り上げ、上述の5点のフランス語写本の制作年代および制作地を13世紀第3四半期のリールに比定している<sup>31</sup>。

### (3) 物語イニシアル

ChC 178の挿絵彩飾を特徴づけるもう一つの重要な要素は、多彩な形式の物語イニシアルである。ChC 178に含まれる計100点の物語イニシアルは、以下の4タイプに分類される。①マタイ、マルコ、ルカ伝(fol. 7 = L, fol. 22v = L, fol. 33v = E)、コリント1書(fol. 73 = P)、ピリポ、コロサイ、ペトロ2書(fol. 88, 89v = P, fol. 123 = S)に見られるように、PやSの文字本体の弓形のスペース(anse)をそのまま、あるいは単純な仕切り線で機械的に上下に二分して、挿絵の枠取りとするタイプ(図1、2)、②ヨハネ伝冒頭(fol. 52 = P)、コリント1書序文(fol. 73 = L)、使徒言行録(fol. 102v = O)、その他何点かのパウロ書簡冒頭イニシアルPに見られるように、(尖塔や屋形等の建築モチーフを伴う)アーチによりイニシアルの文字本体内部を(複数の区画に)仕切り、挿絵の枠取り

とするタイプ（図6、8）、③ヨハネ伝およびパウロ書簡の下位分節冒頭イニシアルの多くに見られるように、本文3-5行分程度の高さのイニシアル（物語イニシアルの場合もあれば単純な蔓草文様等を伴う装飾イニシアルの場合もある）の下方ないしは上方に円形や四葉形メダイヨンあるいはアーチ形により仕切られた区画を1-3個縦方向に連結して並べ、挿絵の枠取りとするタイプ（短冊状の外見は「I」イニシアルに似る）（図3、4）、④第2の画家による幾つかのパウロ書簡冒頭のPおよびD（ヘブル書）イニシアル（コリント2書 fol. 79v、ガラテア書 fol. 83v、テサロニキ2書 fol. 92v、テモテ2書 fol. 95、ティトス書 fol. 96v、ヘブル書 fol. 97v）に見られるように、イニシアル本体の弓形スペースの内部を複数の円形・半円形メダイヨンを組み合わせて仕切り、複数場面の挿絵の枠取りとするタイプ（図5、7）、である。ここでは便宜上4タイプに分類したが、実際には③タイプのイニシアルの「追加区画」内部の仕切りに②タイプが適用された例もある（図3）。①は地域・時代を問わず広く見られる物語イニシアルの一般的な形式であるのに対し、②③④は、そこで用いられる建築モチーフやメダイヨンの形状などに関して、より限定された比較参照項を想定する事が可能である。

タイプ②のイニシアルとしてまず目を引くのは、ヨハネ1・2・3書（fol. 124v, 126, 126v）冒頭のNおよびLイニシアルである（図8）。ここでは、イニシアル内部は、塔や屋形あるいは煙突等の建築モチーフを伴う切妻ないしは半円状の二連アーチにより、上下2段・4区画に仕切られている。矩形のパネル状ミニアテュールないしは物語イニシアル内部をアーチ形を枠取りとして4-8区画の格子状に分割するレイアウトは、特に1260-70年代にフランス北部ピカルディ地方のソワッソンを中心に制作された『聖母奇蹟讃詞集』に見出される特徴的なレイアウトである（図10）<sup>32</sup>。

次に、タイプ②および③の複合型イニシアルの例を見てみよう。第2の画家の手になるガラテア書6章冒頭のイニシアルFは（図6）、文字本体の作る長方形区画内部を二階建ての建築物に見立て、各階は細い支柱により支えられた二連の半円・三つ葉形（地階）あるいは尖頭・三つ葉形（上階）アーチによりさらに2区画に仕切られている。上階の上方には、さらに、半円筒ヴォールトの断面を思わせる緩やかな弧を描く半円アーチと、そのアーチの起点から画面上辺中央部へと伸びる切妻屋根（？）が架けられている。同時代のゴシック式聖堂であれば円形（バラ）窓が置かれるであろう二連の尖頭アーチと半円アーチの間のスペースには、光背のようなメダイヨンに囲まれた聖パウロが座し、半円アーチとその上方の切妻形との間のスペースには、3本のピナクルを戴く塔が聳える。さらに、切妻形とイニシアル本体との間に生じる三角小間のような逆三角形の左右のスペースには、2本の細い煙突と2棟の屋形が左右対称に描かれる。この文字通り「屋上屋を架す」奇妙かつ非合理的な複合的建築構造物は、この挿絵の他にも、ChC 178の物語イニシアルに繰り返し見出される特徴的なモチーフである<sup>33</sup>。

挿絵の枠取りとなるアーチや切妻形は、13世紀中葉～14世紀前半のパリおよびフランス

北部～南ネーデルラント写本彩飾<sup>34</sup>にしばしば登場するモチーフである。しかしながら、1260年代パリの制作とされる《聖王ルイの詩編集》(Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 10525)<sup>35</sup>に見られるように、描かれた物語場面の舞台設定如何に関わらず全ての挿絵の枠取りとして機械的に導入されたアーチの下に建築表現を伴う物語場面を描くのではなく、建築枠組み上方の余剰スペースに非合理的な建築構造を重層的に架すChC 178タイプの表現は、容易に類例を見出さない。ここでは、特徴的な建築モチーフである煙突とアーチ上方の重層的な建築構造物について、現時点で筆者の気づいた比較例を指摘しておきたい。

第1の比較例は、1250年代北フランスあるいは南ネーデルラントの制作と推定される《モーガン・ピクチャ・バイブル》(New York, Pierpont Morgan Library, M. 638)の挿絵である(図11)<sup>36</sup>。同書の旧約聖書挿絵サイクルは全編を通じて機械的に導入された屋形付きアーチ形枠縁の典型例を示すが、アーチ上方に重ねられた変化に富む屋形や塔の表現には、ChC 178のガラテア書6章の物語イニシアル(図6)と同様の、切妻屋根を挟み左右対称に配された煙突<sup>37</sup>と屋形が見出される。特に、先端に煙突本体より口径の大きな円環状の口縁を持つ煙突の形状および配置は、ChC 178のそれに酷似している。

第2の比較例は、13世紀中葉に北フランスのアラスで制作された《ギリユイス・ド・ボワルーの詩編集・時祷書 *Psautier-Heures de Ghiluyes de Boisieux*》(New York, Pierpont Morgan Library, M. 730)のパネル・ミニアテュールである(図12)。A. ベネットによる近年の研究が明らかにしたように<sup>37bis</sup>、同書の詳細なダヴィデ伝全ページ大ミニアテュールの場面構成には上述の《モーガン・ピクチャ・バイブル》との共通点が認められるが、アーチ形枠縁についても我々の探求に興味深い比較例を提供する。詩編80に先行する4区画構成の全ページ大ミニアテュール中の1場面<ダヴィデの戴冠>(図12)は、画面の2/3ほどの高さに位置する四連の半円・三つ葉形アーチの上方(後方)に、半円筒状に湾曲する城壁と屋形や塔が入り組む複雑な建築構造物を示す。第1・2および第3・4アーチの間には2基の塔が立ち、その後方を廻り込むように半円筒状に湾曲する城壁がめぐり、この城壁が画面手前側に迫り出す第2・3アーチ間と画面左右両端にはさらに3基の塔(その頂部にも煙突が建つ)が画面上辺まで聳え、これら3基の塔の間に2棟の屋形が建つ。画家は、城壁の外側の3基の塔と屋形に加え、湾曲する城壁の内側にも2基の塔を加えることにより、ダヴィデ戴冠場面の威厳を高めようとしたのであろう。戴冠場面に三次元的奥行きは表現されていないが、画面枠としての四連アーチの上方のスペースには、城壁外側の塔と屋形、城壁、城壁内側の塔という、構築物間の前後の位置関係が丹念に描写されている。翻って、ChC 178のガラテア書6章の物語イニシアル(図6)に見られる、半円アーチの上方、切妻形の下方に聳える塔は、画家の参照したモデルにおいては、《ギリユイス・ド・ボワルーの詩編集・時祷書》の<ダヴィデの戴冠>に描かれているように、アーチと城壁の間(城壁内側)の塔として、本来は意図されていたのではなかろうか。ChC 178における建築モチーフのいわば平面並置現象は、第1の画家によるヨハネ

伝15章のイニシアルGの下方延長区画にも看取される(図3)。弟子と思しき人物たちとイエスとの会話場面を区切る切妻・三つ葉形アーチによる枠縁の上方のスペースには、白線による繊細な蔓草文様を散らしたブルー地を背に、ランセット窓上端部(?)とピナクル2基を表す太い金色の輪郭線が、あたかも枠から切り離されたプラモデルのパーツのごとく、浮遊している。

第3の比較例は、1230年代から1280年代にかけてパリで制作された4点の作例が知られるいわゆる《サント・シャペルの典礼用福音書(*évangélaire*)》のうち、多数の物語イニシアルを伴う第1・3・4写本である<sup>38</sup>。典礼用福音書というテキストの性格上、これらの写本に含まれる物語イニシアルの大半は短冊状の«I»(*In illo tempore...*)であるが、挿絵画家たちは、挿絵場面を囲むアーチ形枠縁上方の(ときに挿絵区画の1/2強を占める)余剰スペースを埋めるため、第4写本(パリ、1285-90年頃)の<ベトザタの池での治癒の奇蹟(ヨハネ伝5章)>を描くイニシアル(fol. 136v)に見られるように、ピナクルを戴く塔やこれを左右から対称に挟む屋形状モチーフを描き込んでいる(図13)。ChC 178のヨハネ伝およびパウロ書簡下位分節冒頭の物語イニシアルにおいても、一見すると«I»イニシアルと見紛うような短冊状の挿絵区画内のアーチ形枠縁上方の余剰スペースを、屋形付きアーチや塔などの建築モチーフにより充填する例がしばしば見られる(図3)<sup>39</sup>。詩編を除きテキスト冒頭以下の下位分節に物語イニシアル等の挿絵を置く習慣の無い同時代の聖書や福音書写本よりも、所定の祝祭日に朗読される福音書や書簡の章句に対応する挿絵(その大半は短冊状の«I»イニシアル)をその都度挿入する典礼用福音書や書簡集が、ChC 178のヨハネ伝およびパウロ書簡下位分節冒頭の物語イニシアルの着想源となった可能性も考えられる<sup>40</sup>。研究の現状ではモデルとなった写本を特定することは困難であるが、今後の考察において改めて追究したい。

タイプ④のイニシアルは、第2の画家の担当したパウロ書簡に集中的に現れる。テモテ2書冒頭のイニシアルPは(図7)、Pの弓形の上下の縁に内接するように上下に並べた2個の円形メダillonと、左右の縁を直径とする2個の半円形メダillonを組み合わせて弓形スペース内を仕切り、4場面構成の挿絵の枠取りとする。ChC 178にはこのタイプの様々なヴァリエーションがあるが、テモテ2書冒頭イニシアルと同一のパターンは、13世紀最終四半期にイングランドのヨークで制作された《ヨークの詩編集》(London, British Library, Add.ms. 70000)<sup>41</sup>中の物語イニシアルDに見出される(図14)。13世紀イングランドの写本彩飾には、《ヨークの詩編集》の他にも、ChC 178のこれら特徴的な物語イニシアルと着想源を共有すると思われる作例が見出される。1240年代オクスフォードで制作された《ウィリアム・ド・ブレイルの時祷書 *Heures de William de Brailes*》(London, British Library, Add.ms. 49999)(図15)<sup>42</sup>の聖母の時祷・朝課冒頭の物語イニシアルD(*Domine labia mea aperies...*)には、正方形の外枠に内接する円環状のDの文字本体の表面上に、これを一部覆い隠すように、同じ正方形外枠の四隅にそれぞれ内接する4個の小メダillonを並べ、小メダillon内に4場面のキリスト受難伝を、4個の小メダillonと



円環状のDとの間のスペースに四弁形の蔓草文様を、描いた例が見出される。付言すれば、《ウィリアム・ド・ブレイルの時祷書》など12世紀末～13世紀中葉イングランドに比較的作例の多い、メダイヨン間のスペースを埋める花卉状蔓草<sup>43</sup>もまた、ChC 178の物語イニシアル（図4）を特徴づけるモチーフである。

円形や花卉形あるいは菱形メダイヨンによりパネル状ミニアテュールの内部を仕切り複数場面構成の挿絵とするレイアウトは、詩編集等の挿絵を中心に<sup>44</sup>、13世紀フランスおよびイングランドに豊富な作例が知られる。一方、ChC 178や《ヨークの詩編集》あるいは《ウィリアム・ド・ブレイルの時祷書》に見られるような、弓形あるいは円形の物語イニシアル内部をメダイヨンにより区画した作例は、実は限られており、ChC 178の挿絵彩飾の着想源あるいはその画家たちの芸術的出自の探究に貴重な指針を与える。その意味で、さらに興味深いタイプ④のヴァリエーションは、Pの弓形スペース内部に6-7個の小メダイヨンを円環状に配した、コリント2書（fol. 79v）およびガラテア書（fol. 83v）冒頭の物語イニシアルである（図5）。このダイヤル型とでも呼ぶべきイニシアルは、一連の『古代史』写本の挿絵サイクルを論じたD. オルトロヘが1989年の博士論文において指摘したように<sup>45</sup>、13世紀第3四半期北フランス起源の作例として関連づけられた上述のハーグ王立図書館所蔵本（図9）を始めとする計3点の『古代史』写本（およびこれらの写本と何らかの経緯によりモデルを共有するイタリア起源の作例<sup>46</sup>）に集中的に見出されるものである。

ChC 178を特徴づける多彩な物語イニシアルに関する以上の考察は、その制作に携わった（もとより様式的均質性が高い）2人の画家が、政治的にも文化的にも密接な交流関係にあった北フランス／南ネーデルラントおよびイングランドにおいて13世紀を通じて制作された詩編集や時祷書そしておそらくは典礼用福音書・書簡集等の芸術的語彙に通じていたことを示す。特に、同時代の聖書・福音書写本においては極めて異例の、ヨハネ伝およびパウロ書簡の下位分節に施された多数の物語イニシアルとその特異な形状は、ChC 178の挿絵彩飾の構想にあたり、通常の聖書・福音書写本の外にその着想源が求められたことを示唆する。一方、ガラテア書6章のイニシアル等に見られる奇妙な建築構造物の表現は、そこに用いられる特徴的な形状の煙突や塔あるいは屋形などの扱いから、我々の画家が《モーガン・ピクチャ・バイブル》あるいはこれと挿絵図像の源泉を共有すると思われる《ギリユイス・ド・ボワルーの詩編集・時祷書》等の作品と近しい環境に在ったことを窺わせる。さらに、一群の“北フランス系”『古代史』写本を特徴づけるダイヤル型レイアウトの物語イニシアルがChC 178にも見出されるという事実は、イタリア起源の『古代史』写本に同種のイニシアルが伝播した *milieu* の探究とも相俟って、13世紀後半における散文体フランス語写本の多地域展開というより大きな文脈の中に『13世紀フランス語聖書』を位置づける手掛かりとなろう。

### 3. 結語にかえて<sup>47</sup>

本論の考察は、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの初期伝承において失われたオリジナルに最も近いとされる写本群に属する ChC 178の美術史的 positionづけを検証し、その特異な物語イニシアルの形成のメカニズムとその芸術的源泉の探究を通じて、散文体フランス語訳聖書における挿絵サイクルの形成過程の一端を明らかにすることを試みた。これまでの筆者の論考においても度々問題となったように、写本テキストの初期伝承においても、また挿絵彩飾に携わった画家たちの芸術的出自や交流関係においても、フランス北部地方の果たした役割には少なからぬものがある。今後の研究においては、本論第1章において紹介したクライヴ・スネッドンの初期写本伝承系統図における初期段階 $x$ に属する、起源の異なる写本作品に関する考察を進め、散文体フランス語写本の普及にとりわけ深く関与したと思われる北部地方と、これに交わった他地域におけるフランス語聖書の伝播・普及・受容の諸相を究明する端緒としたい。

#### 【本論で取り上げる『十三世紀フランス語聖書』主要写本の略号一覧】（アルファベット順）

- ・ Arsenal 5056 = Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, ms. 5056 『十三世紀フランス語聖書』前半部（創世記～詩篇）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 8, pp. 154 - 155.
- ・ Bern 28 = Bern, Burgerbibliothek, ms. 28 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス南西部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 13, pp. 161 - 164.
- ・ Cambridge Ee. III. 52 = Cambridge, University Library, ms. Ee. III. 52 『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書、部分（創世記～ヨブ記）：イングランド、1320-30年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 6, pp. 152 - 153.
- ・ Chantilly 5 = Chantilly, Musée Condé, ms. 5 (mss. 4 & 5) 『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. 4）：パリ、1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 1, pp. 142 - 144.
- ・ ChC 178 = Oxford, Christ Church Library, ms. 178 『十三世紀フランス語聖書』新約聖書（4福音書～黙示録）：北フランス、1270年代前半？ cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 28, pp. 191 - 194.
- ・ Fr. 6-7 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 7 (mss. fr. 6 & 7) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. fr. 6）：フランス中部、1430年代。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 9, pp. 155 - 157.
- ・ Fr. 398 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 398 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 21, pp. 175 - 176.

- ・ Fr. 899 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 899 『十三世紀フランス語聖書』部分（創世記、出エジプト記、民数記～詩篇、4福音書、使徒行伝、公同書簡（ヤコブ、1ペトロ、2ペトロ）、黙示録）：パリ、1270-75年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 4, pp. 148 - 151.
- ・ Fr. 6258 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 6258 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ？ 1440年代。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 22, pp. 176 - 177.
- ・ Fr. 12581 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 12581 『十三世紀フランス語聖書』4福音書を含むフランス語テキスト集成：シャンパーニュ地方、1284年。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 29, pp. 194 - 197.
- ・ Harley 616 = London, British Library, Harley ms. 616 『十三世紀フランス語聖書』前半部（創世記～詩編；後半部は Y. Thompson 9）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 2, pp. 144 - 146.
- ・ KBR 10516 = Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique / Koninklijk Bibliotheek van België, ms. 10516 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 14, pp. 164 - 165.
- ・ M. 494 = New York, The Morgan Library, ms. M. 494 『十三世紀フランス語聖書』完本：パリ、1280年代初頭。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 3, pp. 146 - 148.
- ・ Mazarine 35 = Paris, Bibliothèque Mazarine, ms. 35 (= olim ms. 684) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 18, pp. 169 - 173.
- ・ Reg. lat. 26 = Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, ms. Reg. lat. 26 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1290年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 25, pp. 184 - 185.
- ・ Rouen 185 = Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (= olim A 211) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1270-80年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 23, pp. 178 - 181.
- ・ St-Omer 68 = Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 24, pp. 181 - 184.
- ・ Strasbourg C IV. 10 = Strasbourg, Bibliothèque nationale et universitaire, ms. C IV. 10 『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書、部分（創世記～詩篇）（1870年焼失）：制作地・制作年代不明（15世紀？）。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 11, pp. 159 - 160.
- ・ Thott. 7<sup>2</sup> = Copenhagen, Royal Library, ms. Thott. 7<sup>2</sup> 『十三世紀フランス語聖書』後半部（詩篇～黙示録）パリ、1290-1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 15, pp. 165 - 166.

・ Y. Thompson 9 = London, British Library, Yates Thompson ms. 9 (= olim Additional ms. 41751) 『十三世紀フランス語聖書』 完本・後半部 (箴言～黙示録；前半部は Harley 616)：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 2, pp. 144 - 146.

#### 【図版キャプション一覧】

- 図1 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ7 マタイ伝冒頭 イニシアルL 〈エッサイの樹〉
- 図2 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ33v ルカ伝冒頭 イニシアル E
- 図3 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ62v ヨハネ伝15章 イニシアルG
- 図4 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ72v ロマ書16章 イニシアルG
- 図5 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ79v コリント2書冒頭 物語イニシアルP
- 図6 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ85v ガラテア書6章 物語イニシアルF
- 図7 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ95 テモテ2書冒頭 物語イニシアルP
- 図8 オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館178番写本 『十三世紀フランス語聖書 (新約聖書)』 フォリオ126 ヨハネ2書冒頭 物語イニシアルL
- 図9 ハーグ、王立図書館、78 D 48番写本 『古代史』 フォリオ1 物語イニシアルQ
- 図10 サンクトペテルブルグ、ロシア国立図書館 ms. Fr. F.V.XIV. 9 《聖母奇蹟讃詩集》 フォリオ76v
- 図11 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 M. 638番写本 《モーガン・ピクチャ・バイブル》 フォリオ40
- 図12 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 M. 730番写本 《ギリュイス・ド・ボワルーの詩編集・時祷書》 フォリオ94
- 図13 ロンドン、大英図書館、Add. Ms. 17341 《サント・シャペルの第4典礼用福音書》 フォリオ136v 物語イニシアルI
- 図14 ロンドン、大英図書館、Add. Ms. 70000 《ヨークの詩編集》 フォリオ39v 物語イニシアルD
- 図15 ロンドン、大英図書館、Add. Ms. 49999 《ウィリアム・ド・ブレイルの時祷書》 フォリオ1 物語イニシアルD

#### 註

1 本稿は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した2件の研究報告 (『13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究 - 『十三世紀フ



ランス語聖書』写本挿絵の展開－」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15（2003）年、p. 471-480、および2004年5月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告）においてその概要を示し、平成19-22年度科学研究費補助金（基盤研究C）対象の研究課題（課題番号19520101「中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響に関する基礎研究」）において発展させた、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の続編である。

2 『十三世紀フランス語聖書』写本テキストに関する主要な研究としては、拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美術美術史学』第23号（2009）、pp. (39) - (53)；拙論、「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：〈パリ-アッコンの画家〉帰属作品について」、『実践女子大学美術美術史学』第24号（2010）pp. (39) - (55)；拙論、「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：フランス北部の作例と〈パリ-アッコンの画家〉をめぐって」、『実践女子大学美術美術史学』第25号（2011）、pp. (17) - (38)、の各論文において引用した文献、および以下の註4、9を参照。

3 主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、註1に引用した拙著2003中のリストを参照（修正の必要あり）。

4 BERGER (S.), *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, 3<sup>e</sup> partie.

5 BERGER 1884, pp. 111-119.

6 BERGER 1884, pp. 413 - 414 (ChC 178のカタログ記述には、所蔵機関から伝えられた情報に依拠するとの断り書きがある)。

7 BERGER 1884, p. 448 : «Il faut ajouter à la liste des bons manuscrits de la Bible du XIIIe siècle le Nouveau Testament de *Christ Church*, à Oxford (Voir p. 413.)»

8 BERGER 1884, p. 116-119 (Fr. 899, Mazarine 35, Fr. 398, Reg.lat. 26, Fr. 6258, KBR 10516, Rouen 185, Fr. 12581を初期段階の本文を伝える作例として列挙)

9 Cf. DE POERCK (G.), *La Bible et l'activité traductrice dans les pays romans avant 1300*, dans : *Grundriss der romanischen Litteraturen des Mittelalters*, vol. VI : *La littérature didactique, allégorique et satyrique*, Heidelberg, 1968 - 1970, 2 vols., I, pp. 21 - 48 & II, pp. 54 - 80 ; DECOO (W.), *La Bible française du XIIIe siècle et l'Evangile selon Marc. Remarque critique*, in : *Romanica Gandensia*, 12 (1969), pp. 53 - 64 ; SNEDDON (C.R.), *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., University of Oxford, 1978, 2 vols.; Idem., *The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition*, in : LOURDAUX (W.), VERHELST (D.), éd., *The Bible and Medieval culture*, Leuven, 1979, pp. 127 - 141 ; Idem., *Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle*, in : *La Bibbia in Italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti del Convegno Internazionale, Firenze, Certosa del Galluzzo, 8-9 nov. 1996*, Firenze, 1998, pp. 229-254 ; Idem., *The Origins of the 'Old French Bible': The Significance of Paris, BNF, ms. fr. 899*, in : *Studi francesi*, CXXVII (1999), pp. 1 - 13 ; Idem., *Rewriting the Old French Bible : the New Testament and Evolving Reader Expectations in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries*, in : SAMPSON (R.), AYRES-BENNETT (W.), éd., *Interpreting the History of French. A Festschrift for Peter Rickard on the*

*occasion of his eightieth birthday*. Amsterdam / New York, 2002, pp. 35 – 59 ; Idem., On the creation of the Old French Bible, in : *Nottingham Medieval Studies*, XLVI (2002), pp. 25 – 44 ; BURGIO (E.), I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo (un bilancio sullo stato delle ricerche), in : *Critica del testo : Storia, geografia, tradizioni manoscritte*, VII/1 (2004), pp. 1 – 40.

10 これら 6 写本のうち、M. 494, Y. Thompson 9, Chantilly 5は、いずれも、1884年当時にはその存在が知られていなかった完本の作例の後半部である。

11 Cl. スネッドンによる福音書伝承系統図は、1978年の博士論文掲載のそれ (p.64) が最も包括的であり上記以外の写本の伝承系統も示しているが、それ以降の論文において修正が加えられている。本稿では、1998、1999年およびこれを継承する2002年 (*Festschrift*) 発表論文のそれに従う (2002年発表の伝承系統図からは制作年代の遅い Fr. 6258が除外されている。cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 64 ; Idem., 1999, p. 10 ; Idem., 2002, *Festschrift*, p. 38。

12 初期段階 *x* から区別される 3 段階は、ウルガータ訳ラテン語聖書やその註解を改めて参照し初期段階に無い註解等を追加したマイナーな改変 (改訂版 *a*)、訳語や文体のブラッシュアップを主たる目的に改訂版 *a* とは別個に行われた改変 (改訂版 *b*)、そして改訂版 *b* にウルガータ訳ラテン語聖書を参照した結果を更に加味した改変 (改訂版 *b6*)、とされる。また、これら 4 段階のうち、初期段階 *x* および改訂版 *b6* の系統に属する写本は本来の『十三世紀フランス語聖書』後半部のみである (すなわち『増補版歴史物語聖書』後半部の作例は含まれない) のに対し、改訂版 *a* からは『増補版歴史物語聖書』最初期の作例である 3 写本が派生し、これら 3 点以外のすべての『増補版歴史物語聖書』後半部は改訂版 *b* に由来するという。初期段階 *x* および改訂版 *a*、*b*、*b6* の詳細については、SNEDDON 1998, p. 240-242を参照。

13 Cf. BERGER 1884, p. 413-414 ; PÄCHT (O.) & ALEXANDER (J. J. G.) éd., *Illuminated manuscripts in the Bodleian Library, Oxford. I : German, Dutch, Flemish, French and Spanish scholls*. Oxford, 1969, no. 672, Pl. XL ; SNEDDON, 1978, vol. 1, p.191– 194 (catalogue no. 28) ; Idem. 1998, p. 214, 238, 241 ; Idem. 1999, p. 10, 12 – 13 ; Idem. 2002 *Festschrift*, p. 39 sqq, 53 note 16, 55 note 31; BURGIO 2004, p. 33.

14 聖書本文のレイアウトは 2 欄・42-44行 (本文スペース：240 x 190mm 前後) であるのに対し、目次部分のレイアウトは各章の冒頭句に先立ちローマ数字による章番号を記入するためのスペースを確保するためもあってか 2 欄・38行 (本文スペース：235 x 195mm 前後) である。一方、本文スペースを一回り外側から囲む余白中央部の濃紺のインクによる二重罫線のレイアウトは、全フォリオ (fol. 1-133v) を通じて一貫している。

15 表表紙の内側に貼付けられた効き紙には ChC 178の装丁板には確認されない留め金の痕跡があることから、表表紙内側の見返紙は ChC 178以前に別の書物の見返紙として利用されていたことが分かる。

16 Cf. SNEDDON 1978, vol. 1, pp. 193-194. 表・裏表紙見返紙に残る主要な文書・銘文は以下のとおり：① ChC 178の 2 倍程度のサイズの大型写本に由来するバランブセストを縦方向に利用した裏表紙内側の見返紙：マコン司法管区内でのリヨン大司教の仲介による15世紀中葉の紛争調停記録、② ChC 178よりも若干大きなサイズの写本の表表紙見返紙であった罫線付きの白紙の羊皮紙を再利用した表表紙内側の遊び紙：(a) マコン司法管区の裁判記録文書官セバスティアン・テクスイエ (Sebastien Texier) なる人物が、1554年10月、ブール・カン・ブレスの北東に位置するトレフォール (Treffort) に、ジャン・アネル (Jehan Hanel) とマコンのピエール・グラ (Pierre Gras) なる人物の間の紛争調停のため

赴いたとの覚書（ページ下半部）；(b) 16世紀の蔵書銘ないしはモットー《*A triste cœur Joye desplait*》（ページ中央部）；(c) オークの樹と実を意匠とするペン素描による盾型紋章と銘文（銘文（d）により重ね書きされ判読困難、16世紀？ページ上半部）、(d) 銘文（c）に重ね書きされた17世紀の蔵書銘《*JEhan bapTISTE DEFOREST*》。研究の現状では、これらの蔵書銘の使用者を同定することは困難である。

17 表表紙の内側に貼付けられた効き紙には、クライスト・チャーチの蔵書票とともに同図書館の旧シェルフ・ナンバー《E. 6》が確認される。

18 テキスト欄の行数は以下の通り：冒頭句一覧 fol. 1-6v : 38行；本文 fol. 7 - 85v : 44行；fol. 86-133v : 42行。

19 それぞれの画家がアシスタントに補佐された可能性もあるが、直径30ミリ未満のメダイヨンに平均4～5人の人物を描き込んだ極小の画面においてこれを識別する事は困難である。

20 BRANNER (R.), Note on the Style of the Kansas City Leaf, in : *The Nelson Gallery and Atkins Museum Bulletin*, vol. V, no. 1 (August, 1971), pp. 24-31.

21 BRANNER 1971, fig. 1, 2.

22 BRANNER 1971, fig. 4.

23 BRANNER 1971, fig. 3.

24 BRANNER 1971, fig. 5.

25 BRANNER 1971, fig. 6 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 493).

26 BRANNER 1971, fig. 7 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 8865), fig. 8 (St-Omer, Bibliothèque municipale, ms. 174).

27 BRANNER 1971, p. 31 note 6. モン・サン・テロワ修道院由来の問題のラテン語聖書については、拙著2010、p. (44)、図13および註49に挙げた基本参考文献を参照。

28 OLTROGGE (D.), *Die Illustrationszyklen zur "Histoire ancienne jusqu'à César" (1250-1400)* (Europäische Hochschulschriften, Reihe 28; Kunstgeschichte 94), Peter Lang, 1989.

29 Cf. OLTROGGE 1989, pp. 13-17. 2点の『古代史』写本は、London, British Library, Add. ms. 19669およびPommersfelden, Gräflich Schönborn'sche Schlossbibliothek, ms. 295.

30 Cf. BEER (E.), Das Scriptorium des Johannes Philomena und seine Illuminatoren. Zur Buchmalerei in der Region Arras-Cambrai, 1250 bis 1274, in : *Scriptorium*, 23 (1969), pp. 24-38, pls. 4-13 ; Eadem., Liller Bibelcodices, Tournai und die Scriptorien der Stadt Arras, in : *Aachener Kunstblätter*, 43 (1972), pp. 190-226 ; CLARK (Willene B.), A reunited Bible and 13th-century illumination in northern France, in : *Speculum*, 50/1 (1975), pp. 33-47 ; STONES (A.), *The Minnesota Vincent of Beauvais Manuscript and Cistercian Thirteenth-century Book Decoration* (The James Ford Bell Lectures, no. 14), Minneapolis, 1977.

31 OLTROGGE 1989, pp. 17-20.

32 Cf. VORONOVA (T.), éd., *Les Manuscrits enluminés occidentaux du VIIIe au XVIe siècle à la Bibliothèque nationale de Russie de Saint-Petersbourg*, Saint-Petersbourg, 1996, pls. 44-51, pp. 67-71.

33 Fol. 62v, 66v, 67v, 68v, 69, 71v, 73v, 97.

34 例えば、GABORIT-CHOPIN (D.), éd., *L'art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils*

1285-1328 (catalogue d'exposition au Grand Palais, Paris), Paris, 1998, notice no. 199, 202, 207, 210 ; *Medieval Mastery. Book Illumination from Charlemagne to Charles the Bold / 800-1475* (exhibition catalogue, Leuven, Stedelijk Museum Vander Kelen-Mertens), Leuven, 2002, notice no. 28, 34, 36, 37, 39, 42, 44, 45b, 47-49, 51, 52, 55, 57.

35 『聖王ルイの詩編集』に関する最近のモノグラフ研究として、STHAL (H.), *Picturing Kingship. History and Painting in the Psalter of Saint Louis*, University Park, Penn. State Univ. Press, 2008 を参照。また、同写本の制作年代および制作当初の所有者に関する新たな提案として、以下の最新の研究を参照 STIRNEMANN (P.), *Quand le programme fait fausse route : les psautiers de Saint-Albans et de saint Louis*, in : *Le Programme. Une notion pertinente en histoire de l'art médiévale?* (Cahiers du Léopard d'Or 12), Paris, 2011, pp. 165-181.

36 同写本の制作地については、北フランス/南ネーデルラントとする説とパリとする説があり、現在なお論争に決着を見ない。同写本に関する近年の研究として、以下の文献およびそれぞれに付された参考文献一覧を参照。パリ制作説 : WEISS (D.) et al., *The Morgan Crusader Bible Commentary*, Lucerne, Faksimile Verlag, 1999 ; NOEL (W.), WEISS (D.), éd., *The Book of King. Art, War, and the Morgan Library's Medieval Picture Bible* (exhibition catalogue), Baltimore, Walters Art Museum / London, 2002 ; 北フランス/南ネーデルラント制作説 : STONES (A.), *Questions of Style and Provenance in the Morgan Picture Bible*, in : HOURIHANE (C.), éd., *Between the Picture and the Word* (Manuscript Studies from the Index of Christian Art), Princeton Univ. Press, 2005, pp. 112-121, pls. 152 - 178 ; STIRNEMANN (P.), *Bible Maciejowski*, in : CHARRON (P.) & GUILLOUËT (J.-M.), éd., *Dictionnaire d'histoire de l'art du Moyen Age occidental*, Paris, 2009, p. 142 ;

37 『モーガン・ピクチャ・バイブル』に見られる煙突の表現については、以下の文献を参照。BOUCHÉ (A.-M.), *The View From the Roof : On the Chimneys of the Morgan Picture Bible*, in : HOURIHANE (C.), éd., 2005, pp. 24-50, pls. 11 - 62.

37bis Cf. BENNET (A.), *David's Written and Pictorial Biography in a Thirteenth-Century French Psalter-Hours*, in : HOURIHANE (C.), éd., 2005, pp. 122 - 140, pls. 179 - 212.

38 第1写本 : Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 8892 (1230年頃パリでローマ式典礼用に制作された写本本体に、1240-48年頃、サント・シャベルでの典礼用に特化させるため、fol. 29以下のテキストおよび彩飾を追加) ; 第2写本 : Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 9445 (パリ、1241-1248年頃) ; 第3写本 : Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 17326 (パリ、1260-70年頃) ; 第4写本 : London, British Library, Add.mss. 17341 (パリ、1285-90年頃)。これら4写本に関する近年の研究として LAFFITE (M.-P.) éd., *Le trésor de la Sainte-Chapelle* (catalogue d'exposition au Musée du Louvre), Paris, Musée du Louvre, 2001, notice nos. 35-37, 42を参照。

39 Fol. 53v, 62v, 68, 68v, 69, 73v, 79v, 85v.

40 スネッドンは、ペリコーペ (ミサ典礼の際に朗読する章句) が指示されていることを指摘している。Cf. SNEDDON 1978 p. 192 «Pericope passages are indicated».

41 同写本については、McKENDRICK (S.), éd., *Bible manuscripts. 1400 years of Scribes and Scripture* (exhibition catalogue), London, British Library, 2007, notice no. 109 を参照。

42 同写本については、DONOVAN (C.), *The de Brailes Hours. Shaping the Book of Hours in*



*Thirteenth-Century Oxford*. London, British Library, 1991 を参照。

43 例えば MORGAN (N.), *Early Gothic Manuscripts (I) 1190 - 1250* (A Survey of Manuscripts illumination in the British Isles), London, 1982, pl. 55 (Cambridge, St. John's College, ms. K.30, fol. 86) および BINSKI (P.) & PANAYOTOVA (S.), éd., *The Cambridge Illuminations. Ten centuries of book production in the Medieval West* (exhibition catalogue, Cambridge, Fitzwilliam Museum), London, 2005, no. 70 (Cambridge, Fitzwilliam Museum, ms. 330) を参照。前者の引用例（詩編集）は、物語イニシアルD内の4個の半円形メダイヨンによるレイアウトにおいても、我々の聖書の物語イニシアルと比較しうる。

44 これらの詩編集の作例については、例えば KREN (T.), *French Illuminated Manuscripts in the J. Paul Getty Museum*, Los Angeles, 2007, pp. 19-22 (ms. Ludwig VIII 4) を参照。また、これらパリの作例では、メダイヨン間のスペースは微細な格子状文様で埋められており、《ウィリアム・ド・ブレイルの時祷書》に見られるような花卉状蔓草文様は用いられない。

45 OLTROGGE 1989, pp. 16-17, Abb. 3-5.

46 Cf. OLTROGGE 1989, Abb. 83, 98. これらのイタリア起源の作例については、稿を改めて考察する予定である。

47 本論は、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究C：平成19-22年度）の対象である研究課題の成果の一部である。ここに明記して謝意を表したい。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12



13

14

15